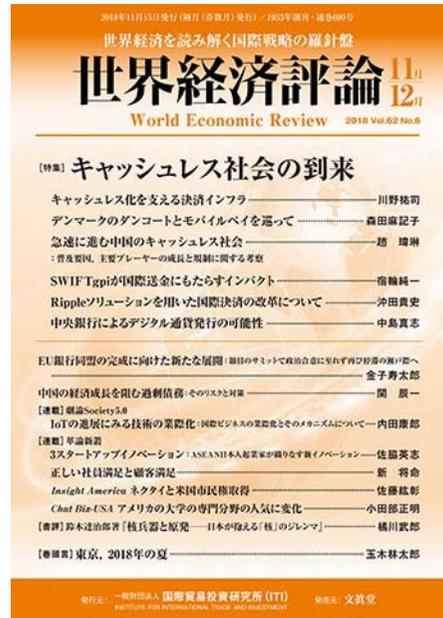


本論文は

# 世界経済評論 2018年11/12月号

(2018年11月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

# 6,600円

税込

17%

送料無料  
OFF



定期購読  
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

# デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## ネクタイと米国市民権取得

佐藤 紘彰

先だって洋服押入れに、赤の布地に MCP 文字と、その上に白豚の刺繍を全体に散りばめたネクタイがあることに気付いた。ぼくが最後にネクタイを締めて正装に身を固めたのは、実に 2006 年 3 月 31 日、アメリカ市民権を受ける帰化式に出た時で、以来ネクタイを締めた記憶がない。猪首のぼくにはネクタイは苦しい。

## 帰化式の式次第

帰化式 (naturalization ceremony) は、アメリカでは式次第が法律で決まっており、国家忠誠宣誓 (oath of allegiance) を行う。ぼくの場合、式が行われたのは連邦地方裁判所として破格な影響力を持つという通称「南部地裁」(Southern District Court) だった。式典用法廷に入ると、ベンチも雛壇もオーク材で作った立派なもので、当日市民権を受ける 200 人から 300 人が皆着席すると、雛壇と帰化人の座ったベンチの間に座った 6 名の事務員が一人一人帰化人の書類を確かめる。

6 人の事務員はアジア系の男女とヒスパニックの若い女性を白人 3 人に交え、作業が終わると廷吏 (bailiff) が、今手続きをやってくれた人たちに喝采をしましょう、薄給ですから、と会場の人たちに呼びかけたのは微笑みを誘った。

しばらくすると、廷吏が「主任裁判官入廷」と甲高い声をあげ、ぼくが 1950 年代に見た時代映画の警蹕「上様の御成り！」を思い出させた。ぼくが警蹕などという言葉を知っていたのは、以前、1860 年日米修好通商条約批准交換のため渡米した一団の一人玉虫左太夫の「渡米日録」を読むと、ワシントンで時の大統領ブキャナンの「出入ノ時モ警蹕セズ、平人ニ同ジ」とあったからだ。玉虫は、アメリカが貴賤上下の礼儀規則が雁字搦めの日本と全く異なることを羨望した。

もっとも、第二次大戦の後の 1954 年以後、大統領が公式の場に現れる時には海兵隊軍楽隊が Hail to the Chief を奏する規定になった。1977 年大統領に就任したジミー・カーターが、それはアメリカの大統領にはそぐわないと軍楽隊演奏を取りやめたら、国民一般から鬨感を買ったことがある。

入って来た主任裁判官は名をマイケル・ムケイジー (Michael Mukasey) といい、小柄な、白髪の初老の人で、だだっ広い雛壇に一人だけ座ると、廷吏が音頭をとって市民権を認められた人たちが「忠誠宣誓」を述べる。

「私はここで誓いをもって宣言する。私がこれまで臣民または市民だった外国の君主、権力者、国家、または主権国に誓っていた忠誠と節義を全て絶対的に、完全に放棄し破棄する」云々というやつだ。

この宣誓については、ぼくは宗教上からこれを公立学校で義務づけるのは違憲とする訴訟に対して最高裁がこれを勝訴としたことを知っていたせいか、単にそういう復唱を嫌うせいなのか、真面目に廷吏の言葉を繰り返すことはなかった。しかし、続いてムケイジー裁判官が「私の父も移民だった」という、かなり長い新市民歓迎演説をし、それから雛壇から降りて、名を呼ばれた市民権を受ける人たち一人一人に握手をしたときは別だった。ぼくは握手をされた時に何故か胸に迫るものを感じた。

## 不法移民の不当な扱い

ぼくが市民権を得た日は季節外れの暖かさで、裁判所を出ると背広にネクタイ姿には暑いほどだった。その日は、偶然ヒスパニックたちの移民権運動が一つの絶頂に達した日でもあり、自分の市民権取得が簡単に済んだことを振り返って、現

実政治問題としての移民問題と現実の手続きとの乖離を思わざるを得なかった。

ただ、市民権取得といっても、ほくのように旅行ビザでここに来た人たちは、その前に work visa があり、永住権（移民権）があった。ほくの場合 work visa はジェットロに雇われて程なく取れ、永住権はカーター大統領が移民局の未処理分を一掃すると宣言した時に貰った。ニューヨークでは政府が World Trade Center の片方のビルの二階分を借り切って2日で実施したが、永住権を1〜2分でくれた様子は今でも覚えている。

ヒスパニックの移民権運動は「不法移民」を主体とする。その数も1200〜1300万人と推定され、これは毎年移民として受け入れる120万人、市民権を受ける75万人（2016年）をはるかに上回る。しかしこの人たちの大部分はアメリカ経済に重要な役割を果たす。とすればトランプのようにこれを不倶戴天と扱うのは不当である。

ところで、2006年、ほくが既に38年居住していたアメリカの市民権を申請することにしたのは、当時書いていたジャパン・タイムズのコラムで、ジョージ・ブッシュ大統領のイラク戦争などを批判していたので、ここで国外退去にされたら大変だと思ったからだ。そこで古い友達レノアの息子のドナルドさんが移民問題の弁護士だったので、ほくが危ないと思った文章をいくつか見せた。すると、この程度の批判なら別に心配することはないといいながら市民権申請手続きをしてくれ、たちまち市民権面接になり、程なく市民になった。

要するに、ほくの杞憂に終わったわけだが、偶然だが、ほくのような懸念を持つ人が他にもいたことを後に知った。ハーバード・ビジネス・スクールで長年教えていた日本人教授が、「ブッシュは性悪な学生だったが、大統領になってし

まった今、日本国籍のままではブッシュ批判も自由に書けない」と、それまで考えなかったアメリカ市民権を急いで申請、取得したと雑誌に書いていたのだ。

### ガサツな国家首班

冒頭から話が全く逸れてしまったが、ほくは婦化式に MCP ネクタイをつけて出たわけではなく、つけたのは義母がくれた蛙の図を散りばめたものだった。MCP は male chauvinist pig の略である。「MCP 会」を作ろうとこのネクタイを会員証として送ってくださったのはほくの同志社の詩の師匠 Lindley Williams Hubbell すなわち林秋石先生で、もう一人の会員は現代米文学の権威金関寿夫先生だった。典雅な秋石先生がそういう乙な協会を作られたのはこの表現が流行っていた1980年代だった。

MCP という表現の歴史を垣間見ると、警官 (cop) を pig と呼ぶようになったのは1960年代と言われ、ベトナム戦争反対運動が高まると戦争続行を叫ぶ男性を chauvinist pigs と呼ぶようになり、ほぼ並行して女権運動が高まると、いくらでも女性に対して礼を欠く男性を male chauvinist pigs と呼ぶようになったらしい。それでも MCP にはある程度ユーモアを含んでいたと思う。

ところが、トランプが登場して以来、女性が少しでも是認しない男は MCP も何も十把一絡げに misogynist と誹謗され、#MeToo 運動の対象になっている。本能的嘘つきでガサツな男が国の首班になったことに対する一つの反応だろうが、悲しむべき事態である。

さとう・ひろあき 日本文学英訳家、文筆家